

# The Generative Enterprise

## の諸側面

「生成文法の企て」と呼ばれる科学運動の様々な側面および全体像を、なるべく広い知的文脈のもとに捉えると共に、その中核をなす文法の形式モデルの変遷を「科学的説明の追究」という概念に焦点を当てながらある程度詳しく論じる予定です。生成文法はどのような知的状況のもとで生まれたのか、「言語」を対象にして近代科学的アプローチを試みるためにはいかなる対象限定が必要なのか、どういった問題意識が生成文法の進展を導いてきたのか、などを考えることにより、これから言語理論の研究を進めるにあたっての「感覚」を身につける上での参考にしてほしいと思います。背景知識がない人も（興味さえあれば）それなりに話が追えるように説明するつもりです。

日時 2017. 9. 4 [MON] >>> 8 [FRI]  
14:00-18:00

参加費無料・事前申込不要

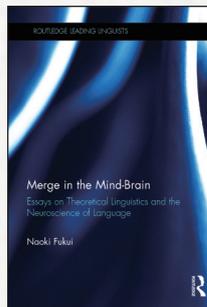
場所 慶應義塾大学三田キャンパス  
北館ホール  
(定員200名・会場にて参加者カード記入必要)

講師 福井 直樹 氏



MIT言語学・哲学科でPh.D.取得(1986)。  
MIT認知科学センター博士研究員、ペンシルベニア大学言語学科助教授、カリフォルニア大学アーバイン校言語学科教授等を経て、現在、上智大学大学院言語科学研究科専任教授。専門は理論言語学、認知科学。英語、日本語で著書、論文を多数出版。数多くの国際ジャーナルの編集委員も務めてきている。

著書・訳書



主催 慶應義塾大学言語文化研究所

お問い合わせ先

〒108-8345 港区三田 2-15-45 慶應義塾大学言語文化研究所  
TEL : 03-5427-1595 (事務室直通) E-mail : genbu@icl.keio.ac.jp  
URL : http://www.icl.keio.ac.jp

4  
[Mon]

### 生成文法の誕生と文法モデルの変遷

1950年代に生成文法が誕生した当時の知的状況を概説します。Zellig Harrisの構造主義言語学、史的文法、数理理論学・計算の理論、生成音韻論、等の背景からどのようにして現代生成文法が誕生したのかを論じます。さらに、誕生した文法モデルがその後どのような変遷を経たのか、その変遷の理由と共に概観する予定です。

5  
[Tue]

### 文法モデルの変遷と併合への途 — 句構造と移動の理論 (1)

生成文法の方法論が一番うまく行った例として句構造のシステムと移動の理論を取り上げ、それらがどのような理論的推移を辿って現在の併合の概念に到ったのかを少し詳しく見ていきます。まずは句構造の理論の進展を辿ります。

6  
[Wed]

### 文法モデルの変遷と併合への途 — 句構造と移動の理論 (2)

移動の理論の中心は変換に関する理論です。初期のパワフルな変換概念をどのようにして制限していくかは1960年代初頭からの課題でしたが、その後、変換自体の形式に係わる制限と共に変換適用に関する一般条件の研究が大きく展開します。この理論展開の過程で、生成文法に特徴的ないくつかの思考法が重要な役割を果たします。

7  
[Thu]

### 日英語比較統辞論 — 説明とは何か

日本語と英語という2つのシステムをシステムとして区別している要因は何か。生成文法の観点から日本語と英語の文法を比較するときは、個別現象だけではなく、システム全体の考察が不可欠です。こういった観点から、日英語統辞法の比較研究を捉えてみると、様々な課題が見えてきます。

8  
[Fri]

### 現在の研究いくつか — 併合、平衡、パラメータ、ラベル付け

主にFukui(2017)の中の諸章で論じている問題の延長上において現在進行中の研究のいくつかについて話したいと思います。